2007年4月10日発行（毎月1回10日発行）●SJ409号
Monthly The Safety Japan
SJ
人とクルマのいい関係をめざして

4
2007 APRIL
●編集室：〒107-8556 東京都港区南青山2−1−1
本田技研工業株式会社
安全運転普及本部内
電話 03(5412)1736
●編集人：千葉英雄
●年間購読料：1200円（定価1部100円・消費税込）
※郵便振替　口座番号：00170-7-173273
※加入者名：㈱アストクリエイティブ
安全運転普及本部係

## 今月のスポット

ゆっくり走るバイクをコントロールできる運転技術を身につけてもらい、若い時以上にバイクの楽しみ方を増やしていただきたい。

（特集より）

CONTENTS

特集：団塊の世代を中心にますます広がるバイクライフ …❶
夫婦でタンデム、家族でツーリング、楽しく安全に走りたい
TRAFFIC ADVICE ……❹
●（株）NTTネオメイト東海支店・交通危険予知実技体験研修会／交通安全指導者として必要なコミュニケーション能力を身につける
SAFETY REPO ……❹
●本田技研工業（株）熊本製作所・親子交通安全教室／地域や従業員の子どもたちが巻き込まれる悲惨な交通事故をなくすための取り組み
●活動短信／交通教育センター3月
OPINION ……❺
●薮下正三／後部座席は安全というのは神話 すべての座席でシートベルト着用を
VOICE ……❺
DOCUMENT EYE ……❻
●信号機のある交差点を横断する自転車利用者の左右確認状況を観察する

## 特集：団塊の世代を中心にますます広がるバイクライフ

# 夫婦でタンデム※、家族でツーリング、楽しく安全に走りたい

家族でツーリングを楽しんでいる三浦さん一家。写真左から幹雄さん、宏樹さん、英子さん、妙子さん。宏樹さんは昨年11月に原付のHondaズーマーから、Honda PS250に乗りかえた

※タンデム=2人乗り

**団塊の世代を中心に50代、そして60代を迎えた人たちに、バイクに新たな楽しみを見出す動きが広がっている。二輪免許を取得して初めてバイクに乗ったライダー、久しぶりにバイクに乗るリターンライダー、そして若い頃から乗り続けているベテランライダーなどから、バイクの楽しさ、安全意識などをさぐるとともに、二輪販売店、交通教育センターがこうしたライダーに、どのような安全アドバイスを行っているかを紹介する。**

そもそもの始まりは、三浦宏樹さんの60歳の誕生日。2人のお子さん（妙子さんと幹雄さん）から宏樹さんに、還暦のお祝いを兼ねて原付のホンダ・ズーマーがプレゼントされた。昨年5月、宏樹さんは2人に突然、ホンダドリーム所沢（埼玉県所沢市）に案内された。『ホンダのお店に行く』というからクルマのお店かと思ったら、バイクのお店で何だろうと思いましたね」。

宏樹さんはこれまで、クルマばかりでバイクには乗っていなかったが、若い頃に乗りたかったと聞いていた妙子さんと幹雄さんは、自分たちも楽しんでいるバイクで定年後の新たな生活を充実させてほしいと考えたのだ。ズーマーにしたのは、他の原付に比べ後部の荷台になる部分が広いから。工作が好きで模型飛行機を飛ばすことを趣味にしている宏樹さんが、模型飛行機を入れる箱を置くための荷台が取り付けられるように選んだという。

納車の日、宏樹さんが運転しているのを見ていた奥様の英子さんが試しに乗ってみた。「今まで一度も乗ったことがないし、頭の隅にもなかった」という初めてのバイク体験に、英子さんは「風が気持ちいい」と感じたそうだ。家に戻っても「気持ちよかった」と話す母を見て、妙子さんと幹雄さんは「お母さんにも買ってあげよう。それで家族4人でツーリングに行こう」と決める。7月、英子さんに原付のホンダ・トゥデイがプレゼントされた。そして、待望の家族ツーリングは泊りがけで静岡県の伊東へ。幹雄さんは「先頭と最後尾を姉と私が走り、両親の運転を見守りながら、目的地に向いました」と振り返る。所沢の自宅を朝7時に出て、着いたのが夕方の5時。ツーリングの間、娘と息子が原付のペースに合わせて走ってくれたと英子さんは笑う。

三浦さん夫妻をサポートしているのはバイク歴14年の妙子さん。巻き込み事故にあったことのある妙子さんは、「バイクを楽しんでもらうためにプレゼントしたのに事故を起こしたらいけない」と、服装から運転まで自分の経験を踏まえて、安全を確保するためのアドバイスを両親に伝えている。

以来、三浦さん夫妻の生活スタイルも変

# バイクという共通の話題がある仲間と一緒に走れることが幸せ

わり、クルマよりも、バイクで出かけることが多くなった。ホンダドリーム所沢が主催するツーリングにも参加した。そして、ズーマーに乗るようになって3ヵ月あまりが過ぎた昨年秋には、宏樹さんはAT（オートマチック・トランスミッション）限定普通自動二輪免許、英子さんはAT小型限定普通自動二輪免許を取得した。

現在、ズーマーから軽二輪のホンダ・PS250に乗りかえた宏樹さんは「混んでいる幹線道路を避けて、茶畑や里山の農道を走ることが多いのですが、気持ちいいですよ」と、バイクライフを満喫する。「家族が集まるとバイクの話で盛り上がることができる。それがまた、楽しい」と語る。宏樹さんは「5月の連休に再び家族4人でのツーリングを考えています」と、目を輝かせた。

## 二輪免許を取得して夢をかなえる

三浦さんと同じく、ホンダドリーム所沢でホンダ・CB750を今年3月に購入した新井均さん（55）は若い頃に、親の反対で断念していたバイクに乗りたいという夢をかなえた。最初は400ccの大型スクーターに乗ろうと、今年1月にAT限定の普通自動二輪免許を取得。しかし、いろいろな大型スクーターを見て回っているうちに、「大型スクーターは年をとってからでも運転できるが、MT（マニュアル・トランスミッション）の大排気量のバイクは体力的に今のうちしか運転できないかもしれない」と考えるようになった。再び教習所に通って、MTが運転できる大型自動二輪免許を2月に取得した。

排気量1000cc以上のバイクに興味を持っていた新井さんだが、営業スタッフの「ちょうどいい大きさで、扱いやすいですよ」というアドバイスと、教習所で乗った安心感からCB750に決めた。3月6日に納車されたばかりで、まずは通勤に利用している。「バイクが好きな知人たちと一緒にツーリングに行くのが楽しみです。機会があれば、ホンダドリーム所沢が主催するライディングスクールやツーリングにも参加したいと思います。CB750を乗りこなせるようになってから、さらに大きな排気量のバイクにもチャレンジしたいと思います」と新井さんの夢はさらに広がる。

今年3月にHonda CB750が納車されたばかりの新井均さん

## 長く乗り続けるために欠かさずウォーキング

宮大工で社寺建築の会社を経営する細見四郎さん（59）は二輪販売店主催のライディングスクールで大型バイクの運転を学んでいる1人だ。昨年6月、ホンダドリーム高槻（大阪府高槻市）でホンダ・ゴールドウイング（1800cc）を購入した。20代前半の5年間、ホンダ・CB250に乗っていたというリターンライダーである。40歳頃から大型バイクに乗りたいという夢を持つようになったが、子育てなどで時間的な余裕もなく、そうこうするうちに免許の更新を忘れて、免許を失効してしまったそうだ。2人の娘さんも結婚して落ち着いた3年前、夢を果たそうと普通自動二輪、そして大型自動二輪免許を取得した。

ゴールドウイングはスタイリング、ホンダへの信頼性から選んだという。注文してから納車までの間、細見さんはホンダドリーム高槻主催のライディングスクールに毎回、参加した。「大きなバイクなので乗ることに対する不安もありましたが、とにかく乗りたいという一心でした。ホンダドリーム高槻の稲富社長からスクールに誘われ、参加していろいろと教えてもらいました。練習していくうちに運転技術が上達して、バイクが自分のものになっていく実感がありました」。

夢に見たゴールドウイングに初めて乗った時、乗りやすさ、安定のよさに感激。それからはバイクに慣れるため毎週日曜日、道を知っている日本海方面へ欠かさずツーリングへ行く。1日に8時間、300kmを走る。「若い時に宮大工の見習いをやったように、修業している意気込みで練習しています。乗る楽しさを感じられたのは3、4ヵ月たってから。この9ヵ月間で8500km走りましたが、まだ乗りこなせたとは言えません。目標の60～70%といったところです」。バイクに乗るためにはまず足を鍛えることだと考え、免許を再取得する前から雨の日を除いて毎日、夕食後1時間歩いている。「バイクに長く乗り続けたい、あと10年は乗りたいので、歩くことも欠かさず続けます」。

細見さんは安全運転にも当然ながら怠りない。若い時と今とでは身体機能や感覚が違うことを自覚して、運転している。それは、「乗る前に、ストレッチをして体をほぐす」「こまめに休憩をとる」「車線変更の時は目視で後方を確認する」「一時停止標識のある場所では、右を見て左を見て、更に右と左を確認する」「スクールで習った運転姿勢やグリップの握り方を心がけて運転する」など。そうした安全運転の姿を一言でいえば、「美しい姿勢でバイクに乗ること」である。細見さんにとって、それは安全と同時に楽しさを兼ねたものだ。「停止した時にバイクを垂直に立ててきれいに止まり、発進した時にもふらつかずきれいに発進できるのが楽しい」。

昨年6月に購入したHonda ゴールドウイングに乗り、9ヵ月間で8500kmも走行したという細見四郎さん

ゴールドウイングに乗り出してから日曜日が待ち遠しくなったという細見さん。「バイクに乗る前も、日曜日にはいつも自然を求めて妻とクルマで出かけていましたが、バイクとクルマでは楽しさが違います。バイクで風を切って走るのは格別の楽しさがあります。バイクならではの楽しみ、感覚です」。最初はバイクに乗ることは危ないからと反対した奥様も、今は自分から暖かくなったらタンデムでツーリングに行こうと言うようになったそうだ。すでに奥様のヘルメット、グローブ、ウェアもそろえ、15～20分ほどタンデムで試走もしている。「5歳になる孫も大きくなったら後ろに乗せてと言うんですよ」。細見さんの楽しい修業はまだまだ続く。

## ゆっくり走る運転技術を身につける

ホンダドリーム所沢で営業を担当している長谷川岳之さんによると、自動車免許を取ると二輪免許も付いていた時代に免許取得した世代は、大型バイクに憧れる傾向があるという。「昨年、ホンダ・CB1300を気に入られたお客様はバイクに乗っていなかったので、私がCB1300の後部座席にその方を乗せて、タンデム走行をしました。その後、店の裏にある道路で100メートルほど走っていただくと、お客様は、スクーターにも乗ってみようと、最終的にホンダ・フォルツァを購入されました」。50代になってバイクに興味を持つ人は車種を問わず、最初から大型バイクに乗りたがるが、実車を見て、実際にまたがって憧れと実車の違いを感じるのか、自分の運転技術、体格に合ったものに落着く傾向があるという。最後まで乗りたいバイクにこだわる人は少ないそうだ。

Honda DREAM所沢・営業の長谷川岳之さん

「大型バイクを運転できる資格はあるが、これまで運転したことのない方、年配にな

# 特集：団塊の世代を中心にますます広がるバイクライフ

ってから自動二輪免許を取得した方、リターンライダーの方は足着きや取り回しができるかなどを気にしている方が多いようです。その不安を解消してあげるようきちんとした対応を心がけています」と長谷川さん。リターンライダーであれば駐車場で少しだけ運転してもらい、発進時のクラッチ操作などの様子を見て、その人の運転技術をある程度見極め、苦労している人には、他の車種の魅力をご案内して、「こちらのバイクにもまたがってみませんか?」と声をかける。購入してから取り回しなどに苦労しないバイクを選んでいただき、積極的にバイクと触れ合い、ライディングする機会を増やしてもらいたいと思っているそうだ。

「団塊の世代はお金の使い方が上手。高価なバイクでも乗りたければ買いますが、一方で締めるところは締める。また、ご夫婦で趣味を楽しみたいといった方も多く、だからこそバイクの安全さと共にタンデムをはじめ二輪の楽しさを伝えていかなければならない」と話すのはホンダドリーム高槻・社長の稲富博文さん。安全に走ってもらうために自店開催のライディングスクール（4～11月の毎月1回）に力を入れる。40代以上のライダーには、低速でいかにバイクを楽しめるかを最優先にしてアドバイスする。「若い時は速さに楽しみを求めがちですが、バイクにはゆっくり自在に走らせる楽しさがあります。中高年層にはゆっくり走るバイクをコントロールできる運転技術を身につけてもらい、若い時以上にバイクの楽しみ方を増やしていただきたい」。

Honda DREAM高槻・社長の稲富博文さん

稲富さんは、若い頃からバイクを乗り続けてきた人は、年配になってバイクに乗り始めた人より、より一層慎重に運転してもらいたいと考えている。若い時の感覚のままで運転しがちだからだ。「実際はスピードに目がついていかず、ブレーキ操作が必要だと気づいた時には、すでに遅れている場合があります。若い時の感覚のままのスピードでカーブに進入し、その結果オーバースピードでカーブを曲がりきれず、事故になる。身体が若い時と同じではないことに気づいていただくことが大切」と指摘する。そこで中高年のお客様にバイクを選んでいただく時には、自分の運転技量や体格に応じた足着き性の良いモデルを選ぶことをおすすめしている。

また、長いブランクを経て乗り始めた人も若い人に感化される傾向があるという。つまり、若い人の運転を見て、あの人ができるなら自分にもできると思ってしまうのだ。そして、バイクに慣れてくると発進・停止が雑になる。「そうした運転はバランスをくずしやすいので、発進・停止は慎重にやらなければいけません。それをするためにはバイクを垂直に立てバイクを安定させることが必要です」と力説する。先の細見さんは、この教えを忠実に実行していることになる。

## リターンライダーの安全の基本は運転姿勢

全国8ヵ所（もてぎ、和光、埼玉、浜松、浜名湖、鈴鹿、福岡、熊本）にあるホンダの交通教育センターでは、専門のインストラクターのもと、ライダーのためのホンダ※モーターサイクリスト・スクール（以下、HMS）を開催している。開催数は年間1000回以上。コースによっては、受講の予約が取りづらいほど、人気のスクールだ。その中の交通教育センターレインボー埼玉（以下、レインボー埼玉）のHMSは初級・中級・上級に分かれており、初級の中にナイスミドルコースがある。これは、「若い人と一緒になって走るのにはついていけない。ゆったり自分のペースで落ち着いて練習したい」というライダー向けのコース。主に40代後半～50代、中には60代の人も参加している。レインボー埼玉のチーフインストラクター・三川順一郎さんによると、参加者の約3分の1は女性で、ご夫婦での参加もあるそうだ。2ヵ月に1回ほどの開催だが、「もっと開催して欲しい」という要望も増えている。「ナイスミドルを好んで何度も参加される方も多いです。初めて参加された方も、同世代の方々と一緒に楽しみながら、トレーニングできることに魅力を感じている方が多いのではないでしょうか」と三川さんはみている。

他の初級や中級コースにも、その年代の方々が多く参加している。リターンライダーから、「初心者ではないので、中級コースに参加すればいいですか?」といった問い合わせも毎回ある。若い頃によくバイクを乗っていたリターンライダーの中には、自分の腕を過信して、いきなり大きな排気量のバイクに乗れる中級コースを選ぶ人が多いそうだ。三川さんは、そういう方にはまず、初級コースで400ccのバイクに乗ってトレーニングしていただくことをおすすめしている。

交通教育センターレインボー埼玉・チーフインストラクターの三川順一郎さん

「それでも、大きな排気量を希望される方には、まず乗っていただいて、ご自身の現状を確認していただきます。リターンライダーの方はしっかりとした意識を持っているので、『まだ自分には乗りこなせない』と気づき、自分に見合ったバイクやコースに変更されます」。三川さんは、この導入の部分で手間を惜しまないように心がけている。そして、アドバイスする際も「大先輩のお手伝いをさせていただいている」という意識で接しているそうだ。

ナイスミドルコースでは、休憩を多めに取り入れ、走るコースもスピードがあまり出ないような設定にしている。運転姿勢もおざなりにしないで、トレーニングを始める前に1人ずつ確認する。若い時に比べて、年配になると視野が狭くなる。身体の柔軟性の低下で身体も動きにくくなるため、スムーズなコーナリングができなくなる。そういった方には、止まった状態でコーナリングの運転姿勢を再度チェックしてもらっている。「ブランクが長い方は手間をかけてでも、まず発進・停止から、徐々に距離を伸ばします。鈍っている感覚と、残っている感覚が何かをご自身で見定めていただきます」。基本は、自分の状態を確認していただくことだという。

年配のライダーも、若い人と同様にバイクを自分の思い通りに操りたいという気持ちが強いと三川さんは感じている。自分のイメージした走りができるように丁寧に運転操作を確かめて走る方が多いようだ。そのため技術的なことにもとても興味を持っていて、「このターンがうまく曲がれない、どのようにすればよいか」といった質問も多い。「HMSで基本操作を身につけていただければ、どの車種にも応用がききます。特にリターンライダーの方には昔の経験がありますので、いくらでもそこから広げていただくことができると思います。基本はぜひ確認してください」と、三川さんはアドバイスする。

## トレーニングを重ね、今はバイクが面白い

このHMSを楽しんでいるのが市川恵三さん（59）。バイクには30年ほど乗り続けてきたが、いずれも駅などへの移動を目的としたスクーターで、バイク自体に思い入れはなかったという。変わったのは2年ほど前、会社の後輩がCB1300を買ったことに刺激され、「自分も大型バイクに乗れる資格があるから、乗ってみよう」と、CB1300を購入。しかし、うまく乗りこなすことができず、気を遣うばかりで楽しくない。そこで、運転技術を向上させようとインターネットで検索して、たどりついたのがHMSだった。まず選んだのが初級コースでトレーニング車両はホンダ・CB400。最初のうちはスラロームなどがうまく走れず、こんなはずじゃなかったのにと思いながら、「自分の運転は間違っていた。基本とは違うことをしていた」と気づいたという。

市川さんはトレーニングを重ねていくうちに、バイクを操ることの楽しさを感じるようになり、ほぼ毎週、初級コースに半年通った。HMSに通ううちに、「自分のバイクで参加できる講習会で走ってみたい」という気持ちが湧いてきた市川さん。「HMSでホンダ・CBR600RRに乗った時、軽くて面白いバイクだと感じました」と、講習会用のバイクとして昨年末にCBR600RRを購入した。

「今、CB1300は主にツーリングに利用しています。ツーリングの頻度は1～2ヵ月に1回程度。誘いがあれば参加するという感じで、自分一人で行くなら、HMSに参加している方が楽しい」そうだ。

HMSは中級コースにステップアップして、今は月1～2回通っている。受講クラスは中級コースかナイスミドルコース。受講者の大半は市川さんより年齢が下だが、バイクという共通の話題があるから年齢差は気にならないという。「共通の話題がある方々と一緒に過ごせることを、幸せだと感じます」。HMSには65歳を超えたライダーも受講している。市川さんはそういう方を励みに、自分で課題を見つけて練習に取り組んでいる。「HMSを受講するようになって運転に余裕が出てきたせいか、より安全に運転できるようになったと思います」。

団塊の世代を中心に50代、そして60代のライダーがバイクライフを楽しむベースには、二輪販売店や交通教育センターによる安全運転へのサポートが大きな役割を果たしているようだ。

HMSを受講して、より安全な運転ができるようなったという市川恵三さん。Honda CB1300は主にツーリングに利用している

※HMSの詳細については、http://www.honda.co.jp/safetyinfo/HMS/mschool.html